



通巻600号記念
エッセイ

第2代・第3代

編集委員エッセイ





モダンメディア出張編集会議 でのハプニング

国際臨床病理センター 所長
河合 忠

栄研化学株式会社の新ビルが建つ以前の古い会議室でのモダンメディア（MM）編集会議に参加した1967年に始まって1982年までの16年間、第2代編集委員の1人として楽しく務めさせていただいた。その間の思い出について書こうとすると、さまざまな事柄が走馬灯のごとく頭の中に甦ってくるが、今回はいろいろなエピソードに彩られた出張MM会議についてまとめてみることにした。年に1度は本社の会議室から離れて出張会議が、多くは新年に1泊2日で、主に熱海・伊豆方面など近隣の温泉宿を会場にして開催された。1泊2日で、ゆっくり温泉につかり、編集会議が終わって宴会となり、酔いが回るとやがて“タレントまがい”の編集委員の余興とカラオケと盛り上がるのが通常であった。残念ながら小生自身は、宴会の席を盛り上げる“能”に欠けていたので、もっぱら眺め役に徹していたように自戒している。例のごとく、1966年から欠かさずに日々の予定を書き込んだ手帳のページをめくって18年間の記録を見ながら3つの異状に気づいた。

1971年の手帳が空白！

全く書き込みが見られない。なぜだか思い出せない。米国から帰国した1962年大晦日から3年間は不完全な記録しか残っていないものの、ある医書出版社のmedical pocket diaryを1966年から現在まで使い続けている。しかし、2年間だけ例外がある。1968年と1970年の2つだけは栄研化学から頂いたblue diary juniorである。1971年もそうであったのではないかと思うが、どうしたわけか空白のmedical pocket diaryを保存してあったのである。自治医科大学退職時に教授室の書類を大処分し、そのときに誤って空白の手帳を保存箱に入れてしまったのであろうか。

2回は遠征旅行であった！

1977年と1979年の手帳には、新年のMM出張会議の記録が残されていない。よく調べると、新年を外した遠征旅行であった。1977年は、1月に通常のMM会議が本社会議室で行われたが、松橋直委員の提案で奄美大島の熱帯医学研究所でハブを見学しようということになり、3月11～14日の3泊4日間、出張会議となった。残念ながら小生は入学試験委員を仰せついていたので、やむなく欠席した。1979年は、手帳の1月の記録にはMM会議の書き込みはなく、2月14日（水）に通常のMM会議が開かれている。しかし、手帳のページをめくるうちに5月7～12日、ホノルルで日米細菌学会議の開催に併せて出張会議が開催されていることを発見した。小生はホノルル滞在3日目から蕁麻疹が始まった。1956～8年の2年間ホノルルに留学中にひどいアレルギーに悩まされた。ホノルルに在住して6カ月ほど経過し、最初は蕁麻疹で始まったが、その後喘息様発作、アレルギー性中耳炎にまで広がり、抗ヒスタミン剤を飲み続けた。その後も、渡米の途中で1962年、1965年とホノルルに3日間以上滞在するたびに蕁麻疹に悩まされていたので、ホノルルでの休暇は苦手になっていた。同じような気候のマイアミでの4年半、そして日本に帰国してからは蕁麻疹に悩まされていない。どうも生まれて初めて美しいハワイに渡航し、花粉に感作されたのではないだろうか。

4回欠席した！

初期のうちには、第1代編集委員の先生方も加わって、年1度の最も楽しい出張会議であったから、よほどの理由がなければ欠席するはずがなかった。前述の1977年に加えて、1973、1976年そして1978年の4回である。1973年と1978年の2回は風邪で

数日寝込んでしまった形跡が手帳に残っている。1976年は、1月14～15日で、14日は他の会議があり、15日は自治医科大学学生寮での成人式に学長補佐として出席せざるを得ない事情が重なり、止むを得ず欠席した。自治医科大学創設時から病理学教授・臨床病理部長就任が決まっていたが、1974年4月自治医科大学本館（附属病院を含む）の完成に伴って現地に赴任した。オイルショックと重な

り、日常検査に使用する酢酸のような基本的な資材までもが不足するハプニングがあり、講座と臨床病理部の立ち上げと充実のために多忙を極めていた時期である。

モダンメディア編集室のお世話で年2回楽葉会が続いていて、いろいろな思い出話をする機会に今でも恵まれている。





研究の今昔

東京大学分子細胞生物学研究所 名誉教授
田 中 信 男

1967年～1982年まで私がモダンメディアの編集委員をしていた頃は、新しい検査薬や検査機器がぞくぞくと開発され、また分子生物学などの進歩で、 β -ラクタム系、キノロン系などの新しい抗生物質、薬剤耐性、抗生物質の作用機序、癌などの研究が華々しい時代でした。生化学、免疫学などの進展も著しく、当時、私は応用微生物研究所におり、周りに医学関係の人が少なかったので、編集委員会で松橋直先生、秋山武久先生、河合忠先生から免疫学の最近の進歩についてお話を伺うことを楽しみにしていました。土屋雅春先生はウィットに富み、福沢諭吉がドイツで外科手術を見学したとき、卒倒したことなど面白い話を沢山きかせてくださいました。大橋誠先生は食品添加の殺菌剤の発癌性が問題となったとき、癌になる前に食中毒で死んだらどうするのかとおっしゃったことなど印象深く覚えています。また、富岡一先生とは栄研叢書「新しい化学療法の手引」の編集では、いろいろと苦労しましたが、今では楽しい思い出となりました。

私は学生時代から病因論に興味をもっていたので、1948年東京大学医学部を卒業後、インターンを終えて、1949年伝染病研究所（現、医科学研究所）に入り、抗体産生の研究を始めました。1953年ハーバード大学（Harvard Medical School）のDr. A. H. Coonsのもとに留学し、Coons先生がスタートした蛍光抗体法の術式を確立し、それをを用いて抗体産生の研究を行いました。1955年に帰国、新設の応用微生物研究所（現、分子細胞生物学研究所）に移り、抗生物質の研究を始めました。1953年WatsonとCrickがDNAの二重らせんモデルを発表して以来、分子生物学が盛んになったので、その手技を用

い抗生物質の作用メカニズムを研究すれば何かすばらしいことを発見できるのではないかと考え、研究をスタートさせました。

1960年頃より抗菌薬の進歩により結核などの細菌感染症の重要性が減り、癌が重大な課題となりましたので、癌の化学療法に重点を移しました。

現在、医学研究の発展はすさまじく、私が名誉教授をしている分子細胞生物学研究所ではゲノム・ポストゲノムの研究が盛んに行われています。酵素蛋白質の立体構造、その構造変化による機能発現、染色体の動態、ヌクレオゾムやDNAの複製、修復、転写プロセス、核内レセプターなどの基礎研究ばかりでなく、神経科学ことに脳の発生の分子生物学、癌遺伝子や癌抑制遺伝子産物の機能解析による癌化プロセスの解明、それらによる分子標的療法、さらには造血や免疫の分子生物学などの研究が盛んに行われており、また、システム生物学など新しい学問も始まっており、私などはフォローするのに大変苦労しています。

一般に疾病は外因と内因の両者の相互作用で起きます。病因論の分野では、20世紀には病原微生物、発癌物質、環境物質（メチル水銀、内分泌攪乱物質など）がくわしく研究され、すぐれた成果をあげましたが、内因の研究にはほとんど手がつけられませんでした。

21世紀にはゲノム・ポストゲノムの研究により内因が解明され、外因と内因とのバランスのとれた医学になることが期待されます。

医学研究の歴史を振り返ると、今昔の感を禁じ得ず、将来の医学の進歩に大きな夢をふくらませております。



「座談会・ 臨床微生物学の歩んだ道」

順天堂大学 名誉教授
猪 狩 淳

私が 3 代目モダンメディア誌の編集委員のひとりとして企画、編集に携わったのは、たしか 1982(昭和 57)年から 1994(平成 6)年の約 12 年間であったと思う。

毎月 1 回の編集会議は、私にはこの上ない楽しみであり、他の編集委員の先生方とお話ができることが心の安らぎでもあった。特に、会議終了後用意されたビールを飲み、弁当を食べながらの編集委員の皆さんとの肩の凝らないリラックスした語らひは、話題が豊富で、実に面白く、心が和むひと時であった。

そんな、12 年間の編集委員時代を振り返ってみると、いろいろなことが思い出され、懐かしい。その中の 1 つに、私が聞き手となり企画した座談会「臨床微生物の歩んだ道」がある。この座談会は、モダンメディア 33 巻 1 号(1987 年)1 月号に掲載された。

この座談会を企画した背景には、私の恩師小酒井望先生と私の間でのちょっとした会話がある。ある時「いったいわが国の臨床細菌学のルーツはどこなんだろうか」と小酒井先生に伺ったときに、「それは慶応大学医学部だ。東京信濃町の慶応大学医学部に“臨床細菌学研究室”という研究施設があり、小林六造先生(溶連菌の小林の分類で有名)を中心に

医学部の先生方が集まってできたものだ。おそらくこれがわが国で最初の研究所ではなかろうか」ということだった。そこで、臨床細菌学研究室の話から始めて、臨床細菌学の現在、将来を展望する企画を立て、編集会議で承認を頂き、座談会を行った次第である。座談会のメンバーは、慶応大関係者として、牛場大蔵先生、市橋保雄先生、浦野 隆先生。臨床病理関係者として、小酒井 望先生、土屋俊夫先生と小栗豊子順天堂医院臨床検査主任の 6 名。

わが国の臨床細菌学が昭和の初期に信濃町の慶応大学医学部の一角で芽生え、臨床細菌学の草分けとなった。1928(昭和 3)年には小林六造先生が「簡明臨床細菌学」の著書を出版された。

この座談会の当時、私は臨床細菌学とか臨床微生物学という名称は新しいと思っていたが、昭和の初期にすでに臨床細菌学の名前が用いられ、臨床に立脚した細菌学が、基礎細菌学とは別に、提唱され、実践されていたことは驚きであった。

さらに、牛場大蔵先生が「感染症の発症機序、それにまつわる宿主-寄生体の関係を中心とした微生物学を発展させ、基礎と臨床を統合した微生物学が実際の医学に不可欠であり、それが医療の実施に極めて重要なことだ」と繰り返し述べられたことが印象的であった。



眼鏡拭き

前日本大学 生物資源科学部
勝 部 泰 次

喜寿を1年余後に控えているとはいえ、最近とみに視力が衰え、しばしば、読み違えたり、読み飛ばしたり、読み取りが遅れたりする。それに加えて記憶も悪くなり、用事を思いついて2階へやっくらさとして上がって、ハテ何のために？　そこで仕方なく階下に降り、家人に気づかれないようにして、考えるということも時々起きる。長谷川町子の“意地悪婆さん”が意地悪を思いつき、実行しようとして玄関先に出ると、何をするために出てきたのか忘れるシーンを思い出して思わず苦笑する始末。

晴天の霹靂というには、少しオーバーであるが、モダンメディア“600号”の記念の随筆の思わぬ依頼を受けて狼狽し、例の早とちりをした。本誌創刊50周年記念に頂き大変重宝している“眼鏡拭き”の印象が強かったせいか“600号”を“60周年”と取り違えた。本稿をしたためるにあたって、いろいろと検討している間に、著しく年代に食い違いがあることを発見し、やっと間違いに気がついた。ここに至る間に若干の日数を要したことは否めない事実である。しかし、このショックは、小生の記憶を40有余年タイムスリップさせ、昭和30年代の栄研培地、モダンメディアを思い出させた。丁度、研究の道を歩み始めたころであり、気分的に大いに若返らせてもらうと同時に、懐かしい思い出、ほろ苦い記憶も蘇った。

その当時、ポリオワクチンの検定用輸入サルモネラ赤痢菌感染が問題となり始めた頃であった。筆者の所属していた国立予防衛生研究所の関係部署ではサル

モネラ赤痢菌の検査に忙殺されており、分離用にSS寒天培地、マッコンキー寒天培地、同定用培地としてクリグラー培地、シモンズ・クエン酸ナトリウム培地、SIM培地などが使用されていた。この時分、製品化されている粉末培地を使うことに、研究費の面から抵抗を感じる向きもあり、原著の処方に基づいて、自作するべきだという意見もあったと記憶している。経費節約という立場と再現性のある一定の品質をもった培地を使用して効率よく大量の検体を処理するという立場の違いが見られた時代でもあった。その後、各種の分離用、同定用の粉末培地が相次いで製品化され、筆者も研究用、学生の教育用に多に活用させて頂いた。また、一部のものでは生培地も市販されるようになり、ますます細菌学的検査が容易になってきている。振り返ってみると、筆者の研究生活は、市販培地の草創期に始まり、その進化、発展の歴史とともに歩んできたともいえる。

研究、教育の第一線から離れて数年になる。毎月送付されてくるモダンメディアは斯界の最新の情報、特に異分野の情報を入手する有力な手段の1つであったが、それは現在でも続いている。前述したような大ボカをやらないよう、眼鏡を磨くばかりでなく、その後ろにあるものも活性化する必要があると密かに自戒している。

モダンメディアが感染症、非感染症についての最新の知見を紹介する総説書、解説書として果たしてきた役割は大きい。3代目の1人としてモダンメディアの一層の発展を期待するものである。



バトンタッチ

ニューヨーク州立大学医学部
エメリタス・ファカルティ

狩野恭一

新編集委員候補のわれわれは、2代目の先生方と一緒に東北新幹線で仙台へ向かった。窓外の緑が梅雨に煙むる昭和57年の初夏のことであった。

その夜の出張編集会議が型のごとく終わると、2代目有志による伝統芸能競演会となった。これは帰国直後の私にとって、知らなかったと言えは嘘になるが、^{カエリ}復路のカルチャーショックの1つとなった。

会の白眉はH. M. 先生の日本舞踊? であった。嫋嫋と流れるアリランのメロディに乗って、先生の舞は果てしなく続くように思われた。韓国のオモジのような無表情のまま、なまめかしい手振り、内股気味の優雅な脚の運び、一同息をのんで見守るばかりであった。

ト리는敬愛するM. T. 先輩率いる“どじょうすくい”の揃い踏みであった。このひなびた曲はなぜか私の郷愁をかきたてた。酔眼を凝らして、こまめに動く先輩の姿をみつめた私は、あっと驚ろき、思わず「Oh Hun do shi!」と叫んだ（どうかハンドーシャイと発音して下さい）。躍動する股間にチラチラするのは、まさしく日本通のアメリカの友人が“江戸の華”と呼んだ“Hundoshiの前だれ”であった。かくしてわれわれは先代のアーティストから伝統文化を受けつぐことになった。

浦野編集長の大きくて深い懐に抱かれて、大過なく過ごすうちに任期は終わりに近づいた。噂によると次期候補の先生方は、いずれも個性豊かな才人のことであった。

特に私と親交のあったM. S. 先生は、当代（東大）随一のタレントであった。本職の病理学はもとより、洋画、オペラ等々先生の余技は多才を極めた。医科研在職中にさる有名歌劇団のオーディションに合格された。あわやデビュー寸前、蒼くなって駆けつけた事務長が“どうか行かないで”とすがり

ついた一幕もあったとか。

さて恒例の4代目への引き継ぎの編集会議は平成6年正月、“潮騒”の舞台、伊良湖岬で行われた。われら“無芸大食の3代目”もカラオケ時代にふさわしく各自がととときのNo.に磨きをかけ、満を持して会議に臨んだ心算であった。

宴の前半にかの“スーパースター”がつと立ち上がるといきなり、イタリアものらしき“アリア”を唄いはじめた。天才はいつでも発火する。

ああ！ その朗朗たるテノールの素晴らしさ、豊かな声量は満場を圧して響きわたった。

みよ！ 冷静、水のごときモダンメディアの女王の瞳もうるんできたではないか。会場の入口では姐さん達が盆を胸にうっとりとして聴きほれているではないか。

こうしたハイセンスの雰囲気になれない私には、とつても長いアリアであった。そして、フィナーレ近くの絶妙なりフレイン、しかし、猫に小判は“too much”であった。

この有難いリフレインも私の耳には、「Oh! 夏の屁（日?）よ、夜鷹の（豊かな?）くらしよ!」と聞こえてならなかった。隣のわれらが“二次会のエース”I. J. 先生は、「これじゃあ、俺の“スーダラ節”を歌うわけにはいかねえ」と憮然として呟いた。

しかり、これはわれら旧人類の慣れ親しんできた“あいまい志向の伝承”とは異質なものであった。新たな発展に向けてのギヤーチェンジの軋みの音であったかもしれない。

そして1年後、お色直しを済ませたA4のモダンメディアを手にした。表紙のたっぷりした余白とさらっとした水彩画を眺めて、あの夜の“queer”なバトンタッチを改めて思い出した。



あわや新年号欠番

豊寿園医院 院長
向 島 達

モダンメディアが600号を迎えるとのこと、まずお喜び申し上げたいと思います。

半世紀にわたり、医学関連の分野の多くのトピックスを分かりやすく、取り上げ、現場の人たちのバイブルになっていたと思います。これまでの間、編集・出版のご努力とこの雑誌を、全国の求める人に提供されてきた、栄研化学(株)の熱意には頭が下がる思いがいたします。そのうえ、この雑誌が、栄研化学(株)の媒体でなく、純粋な学術雑誌を目指したことも、初代の先生方、栄研化学各位の心意気を感じ、流石だと思っています。モダンメディアには、その時代時代、現場の諸先生のNEEDを小雑誌に凝縮されていると思います。思いつくまま、アルツハイマー病との関連でみられた、狂牛病・クロイツヘルドヤコブ病、人畜共通感染症、加齢との関連で活性酸素やフリーラジカルなどなど、その時代でも、また今日の医学で話題になっているテーマが取り上げられていることからもうかがわれます。

私は、第3代目の編集員を仰せつかり、足掛け10年余にわたり務めさせていただきました。毎月開かれる編集会議で、各編集員の方々から、各自の専門分野でのトピックスや情報の提供・解説がなされ、その中でテーマを決める作業が行われるのです。この会議を通じて、私自身が、又とない他分野の勉強であったこと、さらに出張編集会議などで、諸先生と親しくお付き合いさせていただくなど良き思い出が数々です。その中で、私が一番肝を冷やした出来事の顛末を記して、記念号に投稿させていただきます。

モダンメディアでは、例年1月号の編集は、その他の月の編集と異なり、1つのテーマを取り上げ、1人の編集員が、その分野の専門家を集め、座談会形式で纏め、雑誌にするのが通例でした。古くは、「水」、「酒」など、今でも、含蓄のある素晴らしい座談会を思い出します。そんな中、この号に、

私自身が知りたいと願い、これからの時代にとっても提案した「脳を語る」というテーマが選ばれ、私が責任者となり、諸先生を選び、座談会を開くことになりました。しかし、このテーマが、よもや600号の連続性に危機をもたらすとは思いませんでした。

幸い友人に脳の専門家がおり、その先生にそれぞれの分野の専門家を紹介してもらい、先生の司会で座談会が始まりました。座談会当初、「レーガン大統領が、就任演説で、Brain Decade（脳の10年）と名付けたこと、東京都も同じテーマの動きがあるときであり、実に良い企画」と諸先生に褒められたのはここまでで、発表形式が学会発表、雑談の形になり、当方の希望した座談会形式になることなく終了。のちに、記録したテープを起こして纏めました。座談会形式にはほとんど無理と分かりました。私が、先生方に論点を箇条書きした企画書を出し、つめておけばと思いながら、友人に丸投げした私の失敗だったと後悔するも後の祭り。出席者に戻し、書き直してもらおうとしても、内容的、時間的に無理であると感じ、呆然と同時に、出版以来初めて、新年号欠番の悪夢が襲いました。そんな絶望感の中で、何度か読み直すと、興味ある話が、いろいろな場面での各所の雑談に出ていることが分かり、これを、項目ごとに纏めていくことにしました。そのように出席者に伝えると、各位から、自分の発言をできるだけ忠実に再現してほしいなどさらに困難が生まれました。12月まで、その方向でやるも一進一退、欠番の悪夢と自分の不運を託つことしきりでした。12月に入り、気持ちを直して纏まった部分を、その場で遠藤さん、大森さんがパソコンに入力、清書、その間に、次の編集をやる自転車操業を何度も繰り返す、その作業は、毎日深夜に及ぶ有様でした。これ以上待てないという暮れも押し詰まった12月26日の朝5時に、最終原稿が出来上がり印刷

所に持ち込むことができました。長谷川先生の挿絵など入れて、綺麗に出来上がり、結果は評判が良いような話で安堵しました。後日、司会をやった友人が定年の際、この新年号を復刻され、多くの方にお配りいただいたと聞き、私たちの編集を良しとしてくれたと感じました。あの出版には遠藤さん、大森さんの大車輪の活躍がなければ、出来なかったと思いい感謝しています。600号にわたる連続を繋げた喜

びを感じています。

現在、電子媒体に自分の論文を開示し、多くの読者が自由に見られる時代になり、紙媒体が少なくなるといわれていますが、論文の内容を吟味して、筆者を選定して編集したモダンメディアの方針は今後とも重要であると信じています。今後も、この分野の羅針盤であってほしいと願っています。





門前の小僧

帝京大学名誉教授・
帝京大学医真菌研究センター客員教授
山口 英 世

「モダンメディア」編集委員会ときくだけで今でも数々の懐かしい思い出が脳裡を横切る。何しろ私を含めて各々専門を異にする7名の委員が10年余りにわたって毎月1回ほぼ欠かさず集まり、めいめい得意の分野についてうんちくを傾けて語り合い議論し合ったのだから、それがどれほど刺激に満ちた楽しいものだったかは容易にご想像頂けよう。私は仕事柄、これまで数多くの学会誌や商業誌の編集にかかわってきたが、「モダンメディア」の場合ほど頻繁に開かれ、委員の専門がバラバラで、しかも互いに勝手気儘に意見を述べ合う編集委員会の例をほかに知らない。一応は型通りの編集会議で始まるのだが、それを早々と切り上げると、いよいよお目当ての言いたい放題のいわば放談会に移る。頃合いを見計らって出される事務局心付けのアルコールの勢いも手伝って、談論風発、話題は医学やサイエンスの分野にとどまらず、その時々社会・政治・国際問題などに至るまで果てしなく広がり、思わず時間の経つのも忘れてしまう仕儀と相成るのである。ただし、当編集委員会の名誉のために一言申し上げると、お互い怪気炎を上げているうちに、本人も気がつかなかった面白いテーマがひょっこり飛び出してきて、それが編集の恰好の材料になるのだから、決して無駄ではなかったと思うのだが、これはいささか手前味噌の強弁か。

私の専門は、幸か不幸か医真菌学とよばれる病原微生物学の中では最もマイナーな分野である。私が編集委員になる前には、病原真菌の生物学や抗微生物薬の作用メカニズムなど限られたテーマの基礎的研究以外には全くといってよいほど無関心であった。臨床検査医学とその関連分野の学術情報誌としての「モダンメディア」の存在は無論知っていたものの、ろくにページをめくったことすらなかったのである。そんな私だったから、2代目編集委員の田中信男先生から、「次の編集委員に君を推薦しておいた

よ。」と言われたときは、大いに不安であった。しかし、先生は「暫く顔を出していれば何とかなるよ。」と気軽におっしゃってくださったので、余り気が進まないままお引き受けする次第になったのだが、この予想が大はずれだったことは冒頭に述べた通りである。

編集会議の楽しくも刺激的な議論が、私の場合、研究の方向付けにどれほど大きく影響したかをはっきり認識したのは大分経ってからである。十余年にも及ぶ編集委員のお役目を終えていた1998年に、たまたま第9回日本臨床微生物学会総会を主宰することになった。その折、私が若い時代に指導して頂いた先輩から、何でアンタはこういう領域に入り込んでしまったの？ と訝しげにたずねられて、ハッと気がついた。私の研究目標を、純基礎微生物学領域から感染症の診断・治療・予防といった応用領域へとシフトさせたきっかけや理由を求めるとしたら、それは「モダンメディア」の編集会議の中にあっただとしか考えられない。その開放的で学際的な雰囲気、医学のさまざまな研究分野、とりわけ適正な診断・治療に直結する臨床検査医学に対する関心をいつしか芽生えさせ、自分でも意識しないままに深化させたに違いないのである。「門前の小僧習わぬ経を読む。」とはこういうことなのだろう。

振り返って考えてみると、「モダンメディア」の編集委員になった時期は、私が新しい研究施設を立ち上げて、どんな研究をやるべきかを模索していた時期と完全に重なっている。臨床検査医学の洗礼を受けたタイミングもまさにぴったりであった。こうした幸運に恵まれて、真菌感染症の新しい診断法、特に遺伝子診断法の開発は、抗真菌薬療法と並んで、その後の私の二大研究テーマとなった。もし再び生まれ変わることができるとしたら、今度は全く別の専門を選んでみたいが、「モダンメディア」編集委員だけはもう1度やるのも悪くないかなと思っている。